

二十一代目柴田勘十郎氏に聞く

(75年大学文学部文化学科卒業)

きょうし

Juliet W. Carpenter
(女子大学学芸学部教授)

三百年の伝統を今に伝える御弓師

Carpenter 柴田さんは二十一代目とお聞きしていますが、柴田家はいつ頃から弓作りを始めたのでしょうか。柴田家の歴史からお聞かせください。

柴田 天文三年、一五三二年から弓作りを始めたと伝えられています。これは織田信長が生まれた年にあたり、かなり眉づばかもしれません。古文書にはつきり記述が残っているのは八代目からで、元禄の頃です。同時に、古地図が残っていて、それによるとこの界限に弓座があり、弓作りをしていた家が多か

ったようです。しかし今では京弓を作るのは柴田ただ一軒になってしまいました。柴田家はその組合の座長をしていたこともあって、今日まで伝統を守り続けてきたのでしょうか。

Carpenter 京弓作りはどうしてここまで衰退したのでしょうか。

柴田 明治維新からだんだんと減ってはきていたんですが、終戦後、GHQが武道統制を行ったため、弓道も剣道もたちゆかなくなりました。弓には京弓、江戸弓、尾州弓、薩摩弓の四種類あったのですが、今では京弓と薩摩弓だけになってしまいました。薩摩弓は鹿児島と宮崎県の県境の都城市で今も作られています。

す。機械で大量生産していることもあって、全国の弓の九九パーセントを占めています。

Carpenter 残り一パーセントが柴田さんの弓というわけですね。ところで、柴田さんは結婚されてから弓作りのお仕事に就かれたと聞いていますが、ご実家は違うお仕事だったとか。弓師の家を継がれることになった経緯は何だったのですか。

柴田 実家は伏見で機械工場をしていました。弓師になったのはごく単純な理由で、結婚したのが弓家の娘だったからです。子供の頃から自分でものを作る仕事があったこともあり、刀師とか、刃物にも興味がありました。ただ長男ということもあって母は反対しましたね。父は快く「行ってこい」と。始めてみると、ほぼ一年位で弓作りのプロセスは理解しました。苦



漆を塗る弓の下地の糸を巻く作業

勞したのは僕に美的センスがなかったことですね。芸術的センスがない。

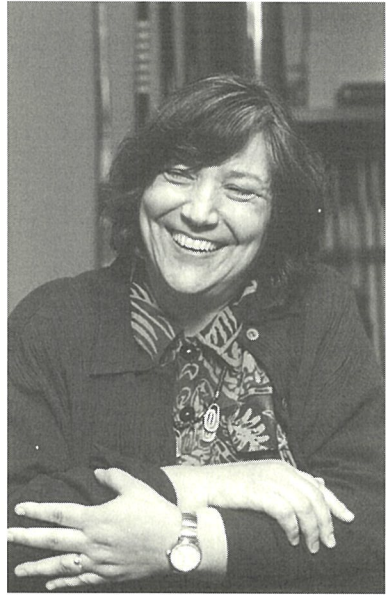
Carpenter 弓は、伝統芸術品ですものね。

柴田 お言葉返すようですが、私は人に自分の作った弓を「芸術品」とか、「美術品」と言われるのが一番嫌なんです。弓も道具として使って欲しい。使い勝手がよく、調子の良し悪しが大事な価値感で、見た目がきれいなだけではだめなんです。たとえば、それが飾り弓であってもおもちゃじゃない。うちでは、だいたい二尺から七尺三寸ものまで作っていますが、作ったものはみんな飛ぶんです。

弓師の適性は、三年で見極める

Carpenter その弓はどのように作られているのですか。作り方を教えてください。

柴田 良い弓を作るのが目的であって、プロセスにはあまりこだわりません。ただ材料の竹は京都の竹を使います。冬は寒く、夏は暑いという京都の厳しい気候に鍛えられた繊維密度の高い竹がいいからです。こういう竹は抜いにくく、加工もしにくいのですが、沓えたい弓ができます。竹を伐採した後、三年寝かせて乾燥させます。明くる年に天日干しをして色抜きをします。そうすると青い竹が真白になります。その後炭火であぶって油を拭きます。基本的に着色はしません。その方が、経年変化でいい味わいが出るし、使えば使うほど馴染んで深い色合いになります。こうしてできた二つの竹の間にハゼノキをはさんで接着剤を入れ、百五十本から百六十本の楔を打って反りをつ



けていきます。考えてみると昔は機械に頼らず人間の方だけで全部作っていたんですね。

Carpenter 最初から最後まで全部一人でされるのですか。

柴田 分業は嫌いなので全工程を一人ですますね。

Carpenter どのくらいで一張ができるんですか。

柴田 早くてほしい三カ月。でも注文のタイミングによって是一年かかります。注文は一帳ずつ受けていますが、作る時はまとめて十帳、十五帳と作っています。一カ月間でできるのがほしい十帳。十五帳作ると日曜がなくなり(笑)。先ほども少し触れましたが、和弓は七尺三寸あります。世界中にいるような弓がありますが一番長い弓じゃないでしょうか。「にぎり」が低い位置、弓の真ん中より下にあるのも日本の弓の特徴ですね。

Carpenter ところで、二十一世紀に向けて二十二代目はどうですか。もう修行を始められているのですか。

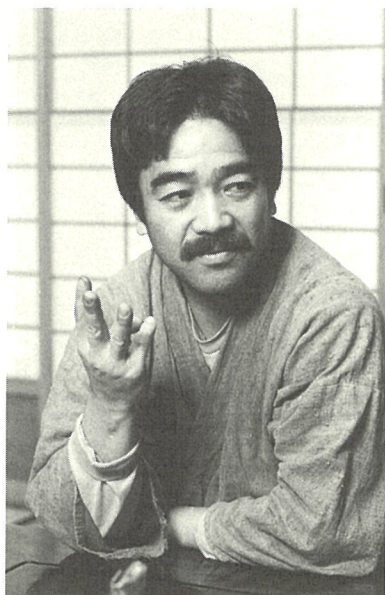
柴田 二十二代目は今中学三年生で、受験生です。トレーニングはまだ全然していません。この仕事は体力が勝負、あと、ものを作るセンスですね。普段から鍛えているので体力は心配していませんが、ものを作るセンスがあるかどうかは、まだわかりませんね。私自身は美的センスは別としても、例えば箱なら箱を作るといったように、一つのものを作る手は持っていたと自負しています。

Carpenter ものを作る手かどうかの見極めはどこでするのでしょうか。

柴田 それは何より刃物が研げるかどうかですね。刃物が研げないと息がされる。これでは仕事にならない。

Carpenter 一人前の弓師になるにはどのくらいかかるのでしょうか。

柴田 難しいですね。何をもちて「一人前」というか。人に誉められるものを作ったからといって一人前とはいえないんじゃないかと。私流にいうなら、自分一人で全部できるか、その仕事でお金を稼いで家族を養えるかどうかでしょうか。どんな素晴らしいものを作っても十年に一つしかできなかつたら、それは一人前といえるかどうか。弓師の仕事に限っていえば一人前になれるかどうかの見極めは三年と決めています。だから弟子を取るのも三年が限度。三年経ったら巣立つというか離れてもらう。人間、一人になると必死になりますからね。そうすると、ハングリー精神も生まれて、本人の将来のためになります。た



だ一人前の仕事はできても一人前の人間かどうかというのほまた、別問題ですからね。うちには大学生を頭に三人の子供たちがいるんですが、子供たちに何か言う度に自分にもいい聞かせています。

Carpenter お子さんの話が出ましたが、柴田さんの学生時代はどうでしたか。

柴田 大学の頃の思い出っていないんですよ(笑)。ただひたすら実家の仕事を手伝っていましたね。仕事量に対してもらえるお金が決まっています、それで働いた分のお金をもらっていました。通学の時間が短くなればもっと家の仕事を手伝えるからバイクを買ってくれと父に頼んだところ、あつさり買ってくれまして、喜んでいたら毎月もらうお金の中からバイク代がきっちり引かれていました。父は代償のないお金は絶対にくれない人でした。

僕たち兄弟はお年玉ももらったことがないんです。その代わり、毎日手伝っていたら結構な金額になるんですよ。特にその当時の僕にとっては大金です。こんなにほんまにくれるのかなあと、いう金額でもくれました。僕自身はよく子供たちにこづかいをねだられています(笑)。

弓を通して自己を表現する

Carpenter 新聞で拝見したのですが、作られた弓は必ず依頼主までご自身で届けられるとか。これも昔からの伝統ですか。

柴田 伝統というより、私のやり方です。依頼主と顔を合わせ、話を聞きながら弓を渡します。北は北海道、南は九州まで車で届けに参ります。実際にお会いすると、人と人のつながりが濃くなりますし、修理の弓を持ち帰るなど商売にもなります。それにいろんな人とお会いできるのは楽しいし、素晴らしいことですから。

Carpenter 海外からの注文もありますか。

柴田 ありますね。主にヨーロッパからの注文が多い。アメリカから注文はありますが、アメリカには弓を作る人がいるのでそちらを紹介するようにしています。

Carpenter アメリカ人が洋弓でなく、和弓を作っているのですか。

柴田 そうなんです。私の元で三年間修行をし、今アメリカのデンバーで京弓を作っています。実は、私は彼を含め三人の外国人に弓作りを教えたことがあります。最初のアメリカ人は、日本のことが好きで伝統文化にも造詣が深かったのですが、悲



しいかな食生活がまったく合わず、三カ月で帰っていききました。次に来たのはオーストリア人でした。夫婦でこの離れに住み込んで修行に励んでいたのですが、子供ができてしまった。結婚して八年。本国では医師にもう子供は諦めた方がいいといわれていた夫婦に子供ができたんですね。それで、結局安定した生活基盤を求めてオーストリアに帰ってしまいました。最後に預かったのがアメリカ人で、彼が現在アメリカで京弓を作っています。義父がコロラド州デンバーで弓道場を主宰しているのですが、彼は義父の教え子でした。和弓が大好きで、もともと縁づくりの職人だったこともあり、ものを作る手を持っています。とにかく弓道が好きで弓が好きだったから、私の厳しい指導にもよく耐えてくれました。

Carpenter お父様というのは二十代目ということですか。

柴田 そうです。私が弓作りを始めて三年くらい経った頃だったでしょうか、義母を亡くしまして、義父はすっかり気落ちしてしまいました。そこにアメリカに來ないかという話が舞い込み、ちようど土地を提供してくれるスポンサーも現われて、デンバーで禅の普及のために弓道場を開くことになりました。

Carpenter 弓道と禅は、どういった関係があるのでしょうか。

柴田 三禅というのをご存知でしょうか。禅には、座禅、吸禅、立禅の三つがあります。座位で修行を行うのが、良く知られる坐禅であり、呼吸法で行うものが吸禅。そして立位で行うものを立禅といい、これが弓道なんです。

Carpenter そうしますと弓道においても、自分を無にするというか、禅の心境を大切にしているのですか。

柴田 そういふ難しい世界から入ると、長続きしない。私が大切にしたいのは、まず弓を楽しむこと。弓の楽しさが分かれば、長く続けられるし、長く続けていると、ふと自分にとつて弓とは何かが分かる瞬間があるんです。日本人というのは、とかく型にはめるのが好きですよ。とくに外国人に教えるときは形から入りますね。でも私は違う。彼らが自分を表現できる方向に持つていこうとします。弓道には、弓を持つてから弦を引くまで七つの基本があります。これを七道というんですが、この基本は守らなければいけない。しかし、力の強い人もいれば弱い人もいるわけですから、あとは自由に、自分のやり方を見つければいいですね。すべて型にはめる必要はない。自分の思うままに引いて自己表現すればいい。

現代人の生活の中に伝統工芸品を

柴田 ところでカーペンター先生は、日本の伝統工芸品をどう思いますか。

Carpenter 興味がありますし、世界に誇れる技術だからぜひとも守っていただきたいと思います。そのためには、もっと多くの人にその良さを知っていただかないといけないと思いますね。

柴田 まったくおっしゃる通りです。平成元年にこの家を改築したときの話なんです。私にはお風呂はこういうものにしたという長年の夢がありました。それは木の腰掛けと木の桶があるお風呂なんです。改築にあたって、私はさっそく木の桶を買いに行きました。八千円もする桶でしたが、十年を経た現在

もその桶を使っています。これがプラスチックの桶ならどうでしょう。十年も使が続けませんか。木の桶は長持ちするし、風呂場に置けば雰囲気もいいし、いい香りだっています。伝統工芸品の良さはそういう視点から考えて欲しいのです。

Carpenter でも伝統工芸品は贅沢品だというイメージがありますよね。

柴田 使い込めば、本当は高くないんです。ただそういうイメージを抱かせてしまったのは作り手側に問題がある。桶は桶なのに、綺麗だから芸術品だという錯覚を抱いてしまう。本来使うものだから、もつと使ってもらう努力が必要なんです。そうでないともますます廃れていきます。

Carpenter 着物なんかそうですね。日常着るには、とてもじゃないけど高過ぎます。

柴田 先ほど、私はプロセスに余りこだわらないというお話をしたかと思うのですが、たとえば竹を切る場合、伝統的な工法に従えばのこぎりで切るべきなのですが、私は機械を使つて切つていきます。切断するという目的においては、同じなのだから、わざわざのこぎりを使い、時間をかけ、結果として高価なものにしてしまうのなら現代的な手法を用いて省力化した方がいいと考えるからです。でもこだわっていないのかといえませんが、そんなことはない。伝統的なプロセスにはこだわっていないが、でき上がりにはしっかりこだわっているのです。

Carpenter いい弓、悪い弓はどこで決まるのですか。

柴田 とても難しい質問ですね。使つてみて、軽く、切れがあつて、しかも冴のある弓とでもいうのでしょうか。最近、年齢

的なものがあるのかそういう弓が作れなくなりました。体力と根気がなくなり、かわりに要領がよくなりましたね(笑)。だから最近の弓は十張作ればいずれも八十点のできて、百点満点がない。若い頃は、十張作ればでき映えはばらばらでも一張は、飛び切りいい弓があったのですが…。

Carpenter 柴田さんのお作りになった弓は、どのようなところで使われているのでしょうか。たとえば、三十三間堂で毎年成人の日に行われる祭事がありますね、あのような場でも使われているのでしょうか。

柴田 大の大会ですね。当然使っている人もいます。一般的には、弓道をやっていらっしやる方がお使いになります。弓道の弓はグラスファイバーなどで作られるようになってきていたんですが、最近また本来の竹の弓が見直されてきていますね。みなさんがよくご存知のところでは大相撲の弓取り式で使われる弓、あれは私がつけている弓です。ただ依頼をいただくのはほとんど修理なんです。相撲協会はお金を持っているはずなのに新調しない(笑)。

Carpenter 伊勢神宮にも納めていらっしやるって伺いましたが、あれは毎年ですか。

柴田 いいえ、二十年に一回です。最近では平成五年に五十九張納めました。伊勢神宮の記録に残るかぎり、毎回柴田家が承っています。先祖の弓の話をしますと、相撲協会の古い弓もそうです。美術館などに展示されている弓の七割方は、柴田家の弓です。私が新婚旅行で行ったサンフランシスコでの出来事です。友人宅に滞在中、私が弓を作っていると聞いて、現地

の骨董屋が古い弓を持ち込み鑑定を依頼してきました。弓に刻まれた銘を見ると、これも柴田家の弓でした。

Carpenter それは、素晴らしいことですね。柴田家の弓作りの歴史を感じますが、今後はどのような目標をお持ちですか。柴田さんの抱負をお聞かせください。

柴田 昔はあったけれど、今はない形の弓とか、いろんな弓を作って個展を開きたいですね。それから、これはまだお話しできる段階ではないのですが、伝統産業連絡懇話会という会があります。来年度設立二十周年を迎えます。なぜか私がこの会長を務めています。昨年オーストリアのウィーンを訪れた際、二十周年を記念して何かイベントを行いたいとぼろりと漏らしたんですね。これをオーストリアで弓道をしている人が耳にし、彼が役人だったこともあって実現しそうな雲行きになってきました。現在、電子メールを使い、現地と話を詰めているところなのです。ぜひとも実現させたいですね。

Carpenter 日本の伝統工芸に従事しながら、年に二回は海外に出かける国際人であり、英語もお話しくなる。しかも伝統工芸を「伝統」という枠に閉じ込めるのではなく、産業として現代人の生活にコミットしていこうとされている姿勢に、日本の伝統工芸のアグレッシブな一面を知ることができました。柴田さんのお作りになる弓が、弓道とともに世界に広く紹介されることを願いたいと思います。

(一九九九年一月二五日収録)